

海外にルーツがある子ども達のドラマ活動の意義と可能性：岐阜県可児市の多文化共生プロジェクトの事例から

松井かおり（朝日大学 経営学部准教授）

1. 研究の背景・目的

本研究は、海外にルーツがあり多様な文化的背景を持つ子ども達が日本人地域住民と協同して行うドラマ活動を調査し、これらの子ども達の発達を支えるドラマ活動の意義と可能性について考察する。文化的に多様な子ども達の学習発達を支える新しい教育方法を探ることを目的とする。

本研究でいう文化的に多様な背景を持つ子ども達とは、学齢期に親の移動に伴って来日し定住した子どもや、日本生まれであるが親世代が移民である2世の子どもなど、国籍にかかわらず文化的境界を越えて生きる人々、すなわち広い意味での移民をさす。90年代の入管法改正以来、そのような子ども達が急増し、外国人集住地区が日本各地に散在するが、まだ彼らへの教育は学校の場合が中心であり、日本の学校や社会に不適応な子どもに対する教育は確固たる方針が打ち出されていない。また文科省が毎年実施している「日本語教育が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」が示すように、海外にルーツがある子どもの教育課題は日本語能力に焦点があてられてきた。確かに日本語能力は彼らにとって教育を受けキャリアを切り拓いていく上で必要不可欠であるが、学校や地域社会で生きていく上でことばの学習だけでは十分ではなく、自分を他者に向けて表現し他者と関係を築いていく力が必要になると考える。多様な他者との協同が求められるドラマ活動の中で、異なる文化的背景を持つ子ども達が何を(誰)を媒介として演技をする人になっていくのかその変容を観察分析したい。

2. 研究方法

岐阜県可児市で実施されている「多文化共生プロジェクト」(2014年度5月～8月)の練習から本番の公演までの参与観察を行った。練習過程ではフィールドノートによる記録、ビデオカメラでの録画、一部音声レコーダーによる録音を行った。その中から、子ども同士(同じエスニックグループ、異なるエスニックグループ)、子どもと大人の間で相互行為が見られる場面を抽出し発話の書き起こしを行い、活動の種類に伴って現れるコミュニケーションのタイプとその頻度を比較した。そのほか海外にルーツがある子ども達の生活習慣と家族環境・言語使用状況を知るために、質問紙に基づいて21名に聞き取り調査を行った。保護者にも聞き取りを行った。プロジェクトへの出席率が高い子どもについては、焦点児童としてプロジェクト開始時から開始後まで学校参観と家庭訪問を継続的に行い、追跡調査を行った。

3. 結果・成果

- (1) プロジェクト内で実施されたドラマで使用する舞台工作づくり、ドラマのお話づくり、演技練習の3つの場面のいずれにおいてもエスニックグループ間を媒介しているのは、日本人成人参加者であった。
- (2) 子ども達の聞き取り調査から、観察対象地域の子ども達は、日常生活において同じエスニックグループの特定の人物のみと過ごす時間が長い傾向にあったが、本プロジェクト参加によって、他のエスニックグループ(日本人を含む)の友達や家族と一緒に行動する者が現れた。焦点児童については、プロジェクト参加前の学校参観では常に一人で過ごす様子が観察されたが、参加後は積極的にクラスメートと関わるなど態度の変化が顕著であった。
- (3) 過去のプロジェクトに参観経験のある子ども達へのインタビューから、過去のプロジェクト参加時の自分と現在の自分を比較する語りにおいて、現在の自分をより肯定的にとらえプロジェクトの意義を評価していることがわかった。

4. 今後の課題

- (1) 観察対象プロジェクトは、在留外国人を孤立させないという社会包摂のミッションを基盤に立ち上げられている。この「多文化共生プロジェクト」を、筆者が英国で調査した同様のドラマ活動、ワークショップ活動と比較し、プログラムの立案までの段階やプログラムの進行など、その特徴を相対化することによって、海外にルーツがある子ども達に対するドラマ活動の在り方を再考したい。
- (2) 本年度の調査を行う中で、過去5年間のプロジェクト記録をはじめ、参加者や演出家、作品視聴者のインタビューを収集する機会を得た。他の外国人集住地域や学校現場において、海外にルーツがある子ども達の教育活動に携わる人々が、自らの実践を振り返る契機となり今後の活動の参考事例となるよう、過去のプロジェクトについてまとめを行いたい。